

研究ノート

近代化日本—欧米との関わりで見る日本の近代化— (3)

—世界史的視点から—

松原正道*

西洋文明の伝道者フランシスコ・ザビエル（Ⅲ）

序

前稿では、アンジローとの邂逅がザビエルをしてそれ迄考えていなかった「日本布教」を決意させる事となり、そのための準備をするようになったと言う事。そして、その彼の渡航を可能にした、当時の日本を取り巻く東（南）アジアの情勢、特に、「海賊」とも言われる「海（貿易）商」達の活動と、それに伴う「海の道」の開拓。これ等について考察した。

本稿では、そうした事に支えられて行われたザビエルの「日本布教」を中心に考察を進めていきたいと考えている。

ザビエルが「日本布教」を考えるようになるための客観的情勢は、ささやかながら既に形成されていたのである。

アンジローをマラッカへ連れて行き、ザビエルに引き合わせる事になった背景として、「交易と布教」を海外進出の旗印としていたポルトガルと言う国、あるいはカトリック教会、イエズス会の来訪を可能にした、先駆的なポルトガル商人によって日本へのルートが開拓されていたと言う事を忘れるわけにはいかないのである。

こうした背景があったところに奇禍とは言えアンジローがマラッカへ来る事となり、その出会いにより、彼の人となり、彼がザビエルをして日本布教に駆ったと言えるのである。

そして、そこには、先駆的商人による「利」追求に関わる思惑も介在していたと言うのである。これについては前稿でふれた。

*淑徳大学名誉教授

I

〈ザビエルの日本来訪〉

ザビエルの渡航に際し、マラッカで船を募ったところ、多くの者が名乗り出ながらも、日本へ行くのだと言う事を知ると、「利」を求める商人達からもそれを断られるのだった。

中国に比べ、未だ、知られる事の少なかった日本。「交易と布教」を海外進出の旗印にしながらもポルトガルの関心の外にあった所(国)。「利」を求める商人達でさえも二の足を踏んだと言う、それだけ、日本が、中国と比べて「未知」の世界で、魅力が感じられず、危険を冒して迄も行きたくないと言う所だったと言う事だろう。

その渡航には、ザビエルに好意的なマラッカの長官で、「インドへの道」の開拓者ヴァスコ・ダ・ガマ(1465頃-1524)の息子シルヴァ・ダ・ガマ(生没年不詳)が、中国人で「海賊」と言われるアヴァンを脅し、それを承諾させるという経緯があったのである。

その上、この渡航は長官の弟で港長のアタイデ・ダ・ガマが港の事は自分の権限内だとして、好意的な兄と違って容易に出港の許可を与えないと言う妨害を受けてのものだった。

こうした遅延はあったものの、1549年6月24日、アンジローを案内役として、その教育係だったスペイン人司祭トーレス Cosme de Torres (1497-元亀 I <1570>), 同じくスペイン人のイルマン(修道士)フェルナンデス Juan Fernandes (1525-67), ザビエルの従僕として中国人マヌエルとインド人アマドール, アンジローの召使のジョアネとアントニオ(共に日本人)等の7人を伴ってザビエルは日本へ向けて旅立つのだった。

そこにはアヴァンが、ザビエル一行を無事に日本に送り届けたかを確認・報告をするために、ドミンゲス・ディアスも乗船していたと言う。

そこへ行く適当な船が見つからなかった。それで長官は、遂に或る一人のシナ人のジャンクを整へるように命令された。このシナ人は、ここでは「ラダラオ」(海賊)の名のもとに知られているもので、不信者であり、家族は、このマラッカに居る。彼は私達を日本にまで渡すことを引き受けた。けれども長官は、なほ事を確實にするため、保証を要求し、若し彼が歸って来て、日本からの私の便りを持って来なかったら、その全財産を没収するといふ威嚇を申し渡した。

アルーベ神父・井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・ザビエル書簡抄』(上) 岩波文庫 2009 353頁

と、ザビエル自身が記しているように、彼の日本渡航のために、長官の脅しで妻(家族)を人質に取られ、ジャンク船を提供し同行させられる事にもなったアヴァンが、「海賊」と言

われていたと言うのである。果して、彼は「海賊」たったのだろうか。

「海賊」が、何故、長官に「命令」されるような関係にあったのだろうか。本当に海賊だったとすれば、官憲である長官に追われる事はあっても、脅されて言う事を聞くと言うそんな身近な所に家族と共にいるのだろうか。この「海賊」が長官の身近な所にいたと言う事は、両者がかたがた離れずの関係にあったと言う事が言えるのではないだろうか。

この時代、五島列島、平戸に根拠地を持った王直（？—嘉靖38〈1559〉）。時代が下って、日本人妻を持ち平戸で息子の成功（寛永1〈1624〉—永禄16〈62〉）を得た鄭芝龍（万曆32〈1604〉—永曆15〈61〉）。彼らは領主松浦氏の黙（公）認のもとで密貿易にも携わり、そのために「海賊」紛いの事としたであろう「海（貿易）商」として活躍していたのである。

従って、アヴァンもそうした「海商」の一人で、そのために長官の命令に従うと言う関係にあったと言えるのではないだろうか。

「ポルトガル人の種子島への鉄砲伝来」は、王直の船（ジャンク船）だったとされるが、彼が、ザビエルの来航に関わったか否かについては聞かない。如何がだったのだろうか。

「海商」達は、一面では、密貿易はもとより海賊紛いの事を行っていたわけだが、特に、政治絡みだったりすれば、「海賊」も立派な提督となり、王直は「徽王」を称し、鄭芝龍にしても明朝末期には総督で伯であり、公だったと言うように官位を持ってもいたのである。

鄭和（洪武4〈1371〉？—宣德10〈1435〉）の南海探検等永楽帝（至正20〈1360—永楽22〈1424〉在位1402—）の積極策から転じ、「土木の変」（1449）以降内向きとなり「海禁策」をとった明朝に、「南倭」（南の倭寇）と言われながらも、「海（貿易）商（賊）」達が東シナ海、東南アジア（南洋）で活発に活動していた「後期倭寇」の時代だったのである。

フビライ（太祖10〈1215〉—至元31〈94〉）の大都以来、紆余曲折はあったが、歴代の都として今日に至る北京。この地域への物資の輸送は中国にとって何時の時代でも重要事項であり、「海禁策」があったものの、海路による輸送は重要で、ここに「海商」達の活動（躍）の場があったのである。

同じ時代、「スペイン無敵艦隊」Invincible Armadaを破った（1588）イングランド（イギリス）のホーキンス Sir John Hawkins（1532—95）、その配下のドレーク Sir Francis Drake（1543頃—96）にしても、奴隷貿易に関わりもし、スペインに対しては、「海賊」行為を行なったわけで、スペインにとっては、正に、「海賊」だったのである。そこには、カトリック（西）とプロテスタント（英）との宗教的対立も関わっていたのである。

2人に見られる如く、国の違い、立場の違いがあれば、海賊も提督であり、提督も海賊とその立場を変えるのは当然の事であって、これは、その後の時代にあっても洋の東西に関わりなく同じである。日本でも台湾でオランダの総督と争った長崎代官で朱印状貿易に携わっていた末次平蔵の例がある。

そして、ドレークはマゼランの一行に次ぐ世界周航をなし (77~80)、マゼランとは違って自らも帰還すると言う、正に、イングランド (イギリス) にとって「サー」の称号を持つに相応しい「英雄」だったのである。

そして、アヴァンについてザビエルは、

彼は渡航の間、いつも私達に親切でありました。然し私達は、善い人となることが出来ませんでした。何故なら、彼は不信者であったからです。又死んだ後にも、私達は神に祈ることによって、彼に対して善い人になることはできません。何故なら、彼の魂は、地獄にいるからであります。

同上訳書 (下) 86-7頁

と、記しているのである。

ザビエルの価値観、「人間」に対する見方は、常に、「キリスト教徒 (カトリック)」であるか否かと言うもので、そこにザビエルの信仰の固さと共に、信仰者なるが故の頑なさ、不寛容さを感じさせられるのである。勿論、プロテスタントが入らないのは言うまでもない。

故に、「親切」にしてくれたアヴァンに対しても、「彼の魂は、地獄にいるから」となるのである。

その点で、200年余り前のダンテ Dante Alighieri (1265-1321) が『神曲』 *Divina Commedia* (1300) で示した価値基準を思い浮かべるのである。

こうしたザビエルの信条の故にか、前稿でみた如く、本国から遠く離れたインドにおいて、ユダヤ人に対する最初の焚殺刑に彼が関わっていたと指摘されるところでもある。

ザビエルから「親切」と言われたアヴァンだったが、航海の途中の嵐で同行の幼い娘を失い、やがて、彼自身も長官に人質とされた妻の元に生きて帰る事なく鹿児島で死に、骨が送り返されたと言う。

「ザビエルの日本布教」、その蔭には、そこに大きな役割を果たしたこうした「人」の「生きる」、そして、「死」があったのである。

この事について、

最初に長官が渡航船を募った時には10人程度のポルトガル商人が希望を出していたが、明帝国の監視体制が強化され中国経由での航海でないことが分かるのと儲けが見込めないのに危険な航海は出来ないとし、色々な口実を設けて全員が降りてしまった。そこで仕方なく、家

族と一緒にマラッカに居住していた「ラドロ（海賊）」と言う徒名を持つ中国人アバンにザビエルの日本渡航を請け負わせることになった。ザビエル一行の安全を担保するためにラド（ロ）ンの妻が人質に取られ、日本に着いたと言うザビエルの手紙が持ち帰られない場合には彼の全財産は没収されるという契約書が取り交わされた。

宮崎正勝『ザビエルの海 ポルトガル「海の帝国」と日本』原書房 2007 207-8頁

と言われているのである。

この事は、アヴァンと、その家族の悲劇を生むと共に、「利」を求めるポルトガル商人達に、日本は、未だ、魅力のない国だったと言う事を意味し、その点で、アルヴァレス達の来航、滞在はザビエルの「日本布教」にとって貴重なものだったと言える。

そして、

マラッカ長官は、ザビエル一行のために航海費用、二年間の布教費と生活費、教会堂建設費用として精選された最上の胡椒三〇バレル（約五七〇〇キロ）、日本国王に呈上するための総額二〇〇クルサドに及ぶ高価な贈り物、つまり音楽時計・オルゴール・眼鏡・装飾された火縄銃・水晶ガラス・緞子・葡萄酒・書籍などを用意した。

同上書 207頁

と言う指摘にあるような、マラッカの長官シルヴァ・ダ・ガマに来日のための準備をしてもらうのだった。そのために、ザビエルは国王に対して、感謝の手紙を送るのである。

一にも二にも、全く、インドの長官に、常に反復して、私を厚く御推挙下さった陛下のお陰に、違いないのでございます。特に、マラッカの長官なるペドロ・ダ・シルヴァ氏からは、無数の恩恵や好意を賜りました。けれども、私は、この大きな負債に報いるには、全くふさはしくない者でございますから、何卒、陛下が、私に代わってお報い下さらんことを、偏にお願い申し上げます。私にこれほど大なる恩恵や好意を寄せられた長官に対して、陛下が、更に大なる恵みを以てお酬い下さるなら、私は、何より有難く感謝し奉る次第でございます。

アルーベ・井上 前掲訳書（上） 343-5頁



鹿兒島上陸地 (鹿兒島市)

ザビエル、アンジロー (ヤジロウ) 像
(大分市)

こうして日本へ向かったザビエルの一行は、2ヶ月弱の航海を経て1549年8月15日に鹿兒島へ到着するのだった。

II

〈ザビエルの日本布教〉

日本への第一歩を鹿兒島に印したザビエルの一行は、彼と同じパウロの教名を持つアンジローの家族・親族を手始めに日本布教を開始するのである。

私達の友パウロは、親族の者に、昼となく、懇篤に説教致しましたので、母や妻を始め、親戚の者や、隣人など、多数の人々が洗礼を受けました。

同上書 84頁

こうして期待に胸を脹らませて始まったザビエルの日本での布教活動は、やがて藩主である島津貴久 (永正11 〈1514〉-元亀2 〈71〉) にも及ぶのだった。

新来の宗教に対する貴久とその母親の反応はすこぶる好意的であった。これは多分、アンジローがキリスト教を説明するさい、デウスを「大日」とし、聖母マリアを「観音」として話したので、貴久らが仏教の一派と捉え、幼少のころから親しんできた真言宗になぞらえて理

解したからであろう。とくに母親は新来の宗教に強い関心を示し、聖母子像の製作の仕方や教理の内容を尋ねたほどであった。アンジローはキリスト教の教理を貴久や母親に説明し、彼らの好意を得ることに成功した。

岸野久『ザビエルの同伴者 アンジロー 戦国時代の国際人』吉川弘文館 2001 158頁

そこには、上記の指摘の如くアンジローの説明の仕方による受け止め方の誤解に基づいたものではあったのだが、当初、ザビエル達によってもたらされたキリスト教（カトリック）は、最初の上陸地である鹿児島において、好意的に受け入れられたと言えるのである。

従って、

パウロが同胞の人々に熱心に語り聞かせたお陰で、殆んど百名にも及ぶ日本人が洗礼を受けた。若し坊さんが邪魔しなかったら、他の凡ての住民も、信者となったに違いないのである。私達は一年以上もこの地方にいた。

アルーベ・井上 前掲訳書（上） 100頁

と、ザビエル自身記しているのである。

当初、対外貿易に熱心な領主の島津貴久（永正11〈1514〉—元亀2〈71〉）も好意的で、家臣の入信を認めており、また、ザビエルと禅僧忍室との交流も伝えられているので、布教は期待通りに進むかに見えたのだったが、

此年葡萄牙商船が鹿児島に来たらずして平戸に来たことが、薩摩藩主の怒りに触れたので、その言分は領内の人民が貿易の利を得ることが出来ず、敵国たる平戸藩の領主に兵器を供給したことは不都合なりと云うのである。当時葡萄牙商人の貿易と、耶蘇会宣教師の布教とが、表裏一体であった点から葡萄牙商人と共に布教師が退去したのは当然のことであつたらう。

葉山萬次郎談『平戸の対外貿易時代の話』
（財）松浦史料博物館 昭和57 10頁

と言う現実。「利」に結びつきの政治が働いたためと、戦国の世にあっては、他の領主は

「敵国」だったわけである。そして、ザビエルの鹿児島滞在は1年程で終わるのだった。

そこに留まること一年ばかりにして、仏僧の憎悪する所となり、薩摩の領主も敵意を以て臨むやうになったので、そこを去ったのであるが、その時分、薩摩には、約百五十人の信者が居た。

アルーベ・井上 前掲訳書(下) 89頁

と自ら記している如く、仏僧の妨害を受けながらも150人程の信者を得たと言うのだが、それが多いのか、少ないのか。

そして、外国人のザビエルにとって、布教の背景にある日本国内の事情、特に、政治情勢をどこ迄理解し得ていたのかと言う疑問が生じる。時は、戦国時代である。

今日でもそうだが、対外活動の際、現地の事情を知る事は必須だが、それが如何に難しいかと言う事。これを彼は何処迄理解し得ていたのか。特に、「人」の信条に関わる布教において。ただ、それにも関わらず、「日本布教」を実行したその信念、行動には感心させられる。

そこで、心変わりをした藩主貴久に対してザビエルは、

この国の領主は、廣大な土地を領有する大名であるが、坊さんはこの領主に迫り若し領民が神の教に服することを許されるならば、領主は神社佛閣や、それに所属せる土地や山林を、みな失ふやうになるだろうと言った。何故かと言えば、神の教とは正反対であるし、領民が信者になると、古来から祖師に捧げられていた尊敬が、消失するからだといふ。こうして遂に坊さんは、領主の説得に成功し、その領内に於て、キリスト教に歸依する者は、死罪に處すといふ規定を作らせた。また領主はその通り、誰も信者になつてはならぬと命令した。

同上書 100-1頁

と記しているのである。

鹿児島にいられなくなったザビエル一行は、アンジローを残して松浦隆信(享禄2〈1529〉-慶長4〈1599〉)が領主の平戸を訪れるのだった。

こうした鹿児島の領主島津貴久の不興を買い布教に失敗した理由として、

アンジローはザビエルの通訳としての機能を十分果たしていなかった、ということになる。アンジローはキリスト教の神学やヨーロッパ

の哲学、仏教を学問的に体系的に学んだ事はなかったし、キリスト教と仏教の区別を学問的に論ずることもできなかったろう。それ故、彼はキリスト教の教理に付いて、日本の僧侶や教養人を納得させるだけの説明ができなかったようである。キリスト教と仏教とをつなぐパイプ役としての通訳はアンジローの能力を超えていたということである。

岸野 前掲書 166頁

と言う指摘がある。

この事は何を意味するのだろうか。アンジローとの邂逅がザビエルに日本布教を考えさせ、来日を決心させたと言う事は紛れもない事実である。最初の渡来地である鹿児島での失敗の理由をこの指摘の通りのものだとすると、その布教が余りにもアンジローの負担にかかったそれだったのではないだろうか。

「能力を超えていた」と指摘され役不足と言えるアンジローに負っていた布教だったとすると、「未知」の世界の日本布教のためには準備不足で不用意だったと言わざるをえない。

ザビエルの日本語については『書簡抄』からは汲み取りにくい。日本布教の基礎を固める事になるトーレスではあるが、来日当初は、日本語にしても、未だ、充分ではなかっただろうし、それは、イルマン（修道士）で、後に日本語が達者になったと言うフェルナンデスにしても同じ事で、これ全てザビエルが決めた事なのである。

後継者のトーレスの21年、フェルナンデスにしても18年の滞在にしてその成果をあげ得たわけである。外国語修得の難しさについては、今日、日本人の誰でも感じているところである。

信仰に燃え、布教を「使命」としてその生涯を捧げたとも言えるのだが、インドにしても香料諸島にしても、『書簡抄』に従えば聊かの失望感を持ったと感じさせるザビエル。それは日本においても言えそうで、こうした失望感はどの辺りに由来しているのだろうか。

溢れ出るとも言える情熱と使命感に達成の喜びを感じさせるにはどうしたら良かったのか。そして、うまくいかなかった薩摩の土地に、アンジローだけを置いていったと言う、この事をどう理解したら良いのだろうか。二人の間でどう言う話がなされたのだろうか。

ザビエルに置いて行かれたとも言えるアンジローは、その後も布教活動を続けるのだったが、次弟にカトリックの記録から消え、その消息は詳らかでなくなり、やがては倭寇の仲間になったのではないかとされるように、歴史の中に消えて行ってしまうのだった。

ザビエルをして日本布教を決意させたアンジローを鹿児島に残したと言う事は、彼を信頼してのものだったとも言えるのだが、鹿児島での情勢もあって、結果的には、「日本人最初のキリスト教徒」アンジローは、ザビエルが後事を託すには相応しくなかったと言う事にもなる。

これは、ザビエルの人を見る目がなかったと言う事か、また、準備不足だったと言うのか、はたまた、信仰、情熱、布教に逸って先を急いでの事か。

それでも、ザビエルは「パードレ・マエストル・フランシスコ」(大神父フランシスコ)と言われ、聖人となるのである。

隣の熊本では、後継者達の布教活動により信仰が盛んとなり、隠れキリシタンの時代を経て今日でもその伝統が続いているのだが、鹿児島についてはそれを聞かない。

領主松浦隆信の庇護を受け平戸で布教活動に従事するようになったザビエルは、ここで数百名の信者を得たと言われているのである。

従って、やがて、ここをトーレスに任せてイルマン(修道士)のフェルナンデスを伴って山口へ至るのである。

そこに暫く滞在した後、京都に赴き、天皇等に謁見し布教の許可を得て、そこを活動の場にしようと上京するのだった。

それは、アルヴァレスの『日本記』等から得た彼自身の布教の姿勢である、領主、国王の理解を得る事で、布教が容易に出来るとする考えに基づいてのものだったわけである。

だが、天皇始め要路に謁見する事が適わず、「応仁の乱」(応仁 I <1467>-文明 9 <77>)後の京都では天皇の権威も墮ちていると、僅か11日間の滞在でこの地を去るのだった。

都は曾て大きな都會であったけれども、今日では、打ち續いた戦乱の結果、その大部分が破壊されてゐる。昔はここに十八万戸の家が櫛比してゐたといふ。私は都を構成してゐる全體の大きさから見て、如何にもありさうなことだと考へた。今でもなほ私には、十萬以上の家がならんでいるように思はれるのに、それでゐて、ひどく破壊せられ、かつ灰燼に歸してゐるのである。

アルーベ・井上 前掲訳書(下) 104-5頁

と、戦乱による都の破壊の様を記しているのである。

尤も、そこには、天皇や将軍に謁見するには、それなりの金品が必要だったと言う、ある意味で最も重要な事の用意がなかったために、都を去らざるを得なかったと言う、現実があったと言う事も伝えられている。



ザビエル公園(日比野了慶屋敷跡・堺市)

上京にあたり、瀬戸内海を船で渡ったザビエルは、寒さの中の道中の難儀さを記しているのだが、その繁栄ぶりを記している堺に上陸し、納屋衆の日比野了慶（生没年不詳）の厚遇を得るのだった。この事が端緒となったと言えるのだが、その後、幾内にキリスト教が広がる事になるのである。

京都での布教を諦め、ザビエル達は往路に立ち寄った、京都を凌ぐとも言える繁栄を示す山口に戻り、ここを布教の地とするのである。

そこには、將軍足利義満（正平13=延文3〈1358〉-応永15〈1408〉）に抗して堺で敗死した（「応永の乱」応永6〈1399〉）が、周防等西国6ヶ国の守護で朝鮮貿易に積極的だった義弘（正平11=延文1〈1356〉-応永6〈1399〉）を父祖にもつ大内義隆（永正4〈1507〉-天文20〈51〉）が支配者としていたのである。

彼は、享禄1（1528）年に21歳で家督を継ぎ、周防、長門、安芸、石見、備後、豊前、筑前の7ヶ国の守護を兼任。105代後奈良天皇（明応5〈1496〉-弘治3〈1557〉在位〈1526〉-）即位の際、多額な金品を贈った事でそれが出来たと言う功績で、太宰大貳の官職をも得ており、海商（賊）の王直等と交わり、対明・朝鮮貿易に積極的に携わっていたのである。

明が興る事で、將軍義満は、貿易の利益を得ようと、冊封制による国交を洪武帝（天曆1〈1328〉-洪武31〈98〉在位1368-）に申し入れ、応永8年（1401）、建文帝（洪武16〈1383〉-建文4〈1402〉在位1398-）の時に認められるのである。彼は、「日本国王源道義」の称号を得、「勘合符貿易」が行われるのである。名を捨てて実を取ると言う義満の深謀遠慮が功を奏したと言えるのである。

そのため、そこで得た、税収の3倍とも言われる富を以て、金閣寺を始めとする北山文化を形成。幕府の文治化を計る財源を得るための対明貿易だったのである。

当初、幕府がこれに携わっていたのだが、寺社や大名が加わり、やがては、これを堺や博多の商人が請け負う形となる事によって、幕府等は名義料を徴収するだけになってしまうのだった。

そして、「応仁の乱」以後、堺の商人を代弁する細川氏と大内氏とが利権を争い、大内氏がこれを独占する事になり、所領地の博多を拠点として対明・朝鮮貿易を活発化するのである。これについては、前稿でも触れた。

こうして得た富を背景に、大内義隆は「応仁の乱」の難を逃れてきた京都の公卿や僧侶・文人を保護、これ等を厚遇。学問、芸術を奨励して京風文化を積極的に取り入れ、山口の街



金閣寺（京都市）



大内氏館築山跡 (龍福寺・山口市)



ザビエル布教の井戸 (山口市)

を京都を模して造営，文化の発展に尽くすのである。

山口において活動を始める事になったザビエルは，当時の山口を，

日本で有数の強力な藩へ往った。此處は山口といふ。この町には一万人の住民がいて，家はみな木造である。此處には沢山の武士や，その他の人々がいて，私達の説く教義は，どんな内容のものであるか，非常な興味を以て聞^{ききみ}耳を立てた。それで私達は，長期にわたり，毎日二度づつ街頭に立って説教する決心をした。

同上書 102頁

と記すと共に，大内家の重臣で，後に，陶軍に組する内藤興盛（生没年不詳）の引き合わせにより領主義隆に謁見するのである。

私達は改めて威儀を整へ，莊重に山口公に謁して，印度総督とゴアの司教とから托された親善書を，贈り物と一緒に差し出した。領主は贈物にも，頗る満悦の体であった。(中略) 私達がこの領内に於，神の教を公に宣布することと，領主の民の中に，信



内藤興盛の墓 (善正寺・山口市)

者になることを望む者があった場合には、自由に信者になれることを私達に許可して頂きたいといふのである。これに就いては、領主は、あらゆる好意を以て、私達に許可を与へた。それから町の諸處に、領主の名の記された布令を掲出させた。それには、領内において神の教が説かれることは、領主の喜びとするところであり、信者になることは、各人の自由足るべきことと書かれていた。同時に領主は、一つの寺院を私達の住居に与へた。私達がこの寺院に引き移るや否や、私達から神の言葉を聴くために、無数の人が押しかけて来た。

同上書 105頁

と、その様を記している。

この様に、鹿児島の場合と異なり、その厚遇ぶりが示される事により、来日以来、布教の地を模索していたザビエルにとって、やっとその場が得られた事になるのである。

粗衣では相手にされないと威儀を正して義隆に謁見。平戸で調達した時計、楽器、眼鏡、鏡、ポルトガルの衣服、絵画、ギヤマンの花瓶、そして、鉄砲等を贈り物にしたと伝えられており、信仰に関わる事とは言え、こうした「儀礼」は必要だったのかも知れない。

従って、山口は京風文化と共に、キリスト教と、それに伴う西欧の文化・文明を受容する事となり、ザビエルにとっても本格的な布教の地となったと言えるのである。

そうした中で、義隆の死の天文20（1551）年、オルガンのような楽器が献呈され、翌21（52）年には歌によるミサが演奏されたと言うのである。それは「隠れキリシタン」時代の「オラショ（祈り）」に繋がっているとも言われるものである。

このような事からか、今日、山口はザビエルのキリスト教布教の地と言う事を売りにしていると感じさせられるのである。

だが、順調とも見えた布教活動も、義隆が44歳の天文20年8月、その美しい容姿を愛し重用していた34歳の陶晴賢（大永1〈1521〉-天文24〈55〉）の謀反により、山口を追われ、長門国深川の大寧寺で一族と共に、そこには京都からの公卿等も含まれているのだが、自刃する事で以て、中断せざるを得なくなるのである。

ザビエルもそれについて記している。

（『書簡抄』〈下〉115-6頁）



大内義隆の墓（大寧寺・長門市）

家臣統制に細心の留意を払い、家臣団の信望を一身に集めた人物であれば、よくその支配体制を維持している。義隆は末世の道者で徳の高い人君であったが、いたずらに公卿の風尚を慕うのみで、戦国武将としての能力と決断に欠け、

福尾猛一郎『大内義隆』日本歴史学会編集

吉川弘文館 平成元年 169頁

と言われる大内義隆だったのである。

これにより、王直等と交わり、対明・朝鮮貿易で得た富を以て、「京風文化」を取り入れると共に、ヨーロッパの文化・文明の象徴であるキリスト教も受容し、「文化都市山口」建設を夢見たと言える大内義隆の思いは画餅に帰してしまうのだった。

この事は、見方によるが、「文化」の魅力に取りつかれ、そこに「夢」を求めたために、「現実」を忘れ、これを蔑ろにした事によって起きた部将・政治家としての末路だとも言える。

その点で、底知れぬ深さを持つ「文化」、それと共に、そこに嵌ってしまいたくなる魅力を持っている「文化」。「現実」重視が重要な武将・政治家にとり、教養、文化、それに根ざした「理想」を持つ事が大事であるのだが、常に、「現実」を忘れる事は出来ない。それを忘れさせ、これにのめり込まされると言う魅力・危険性が、「文化」にはあるとも言える。

尤も、江戸時代の前田家では、今日に伝わる茶の湯、工芸等「文治」を政策として掲げる事で、徳川將軍家に疑われないよう計り、加賀百万石を維持したと言われている。現実を踏まえての事ではあるが。

最期を全うし得なかった西の大内義隆、東の今川義元と、共にその名前に將軍の諱名「義」を得ている武将の二人、そこに、天皇、將軍の持つ(魔)力を感じる。そして、「三代目、唐様で家を売り」と言う言葉を思い浮かべるのである。

「小京都」が各地にあるが、今日、山口では「西の京(みやこ)」と言っている。

謀反人の陶晴賢はその地位に取って代るでもなく、権勢を振るいながらも新領主の大友(大内)義長(?-弘治3<1558)に仕える等から、その謀反は、政治的なものではなく、人としての嫉妬によるものだと言われ、義長共々大内氏の家臣だった毛利氏に討たれるのである。

こうした事で、ザビエルは山口を離れ、豊前(大分)へと赴くのである。

この間、山口において日本人から得たものとして、

日本人はその宗旨の物語の中に、世界の創造を始め、太陽、月、星、天、海、地、その他凡ゆる事物の創造に関する知識が一つもな

い。日本人は、これ等の凡てに葉、元始がなかったのだと思っ
てゐる。彼らが一番驚いたのは、靈魂にも創造主があるといふ教
えを聞くことであつた。

同上書 107頁

と記しており、また、当時の新知識である地球球体説について

地球の丸いことは、彼らには識られてゐなかつた。その外、太陽の
軌道についても識らなかつた。

同上書 115頁

とするのである。

地球球体説についてはザビエルも既に理解をしてはいたものの、地動説については未知のものだつた。これについては、コペルニクス Nicolaus Copernicus (1473-1543) が1543年、死の直前に発表はしていたのだったが、未だ、世に、特に、キリスト教（カトリック）では受け入れられておらず、その後100年余りの歳月を経てようやく認められる事になるのである。

従つて、ガリレイ Galileo Galilei (1564-1642) にしてもそのために裁判にかけられ、自説の撤回を余議なくされ、「それでも地球は動いている」と言つたと言つたエピソードが伝えられているのである。そうした事から、ザビエルの認識の中にも地動説についてのそれはなかつたと言へる。

コメス・デ・トレス神父とジョアン・フェルナンデス修士とがまだ山口にいた時、他の有力な日本の領主が、私の所へ手紙を寄越し、その領主の居る家まで来臨を乞ふと言つて来た。これは豊後の領主であつた。

同上書 115頁

と記している如く、ザビエルは義隆の死の天文20（1551）年豊後へと旅立つのである。

中心地である府内（大分）の外港沖之浜へポルトガル人が嵐の難を避けて来航（1543）して以来、彼らに理解を示し、交易を行いキリスト教にも関心を持つようになっていた筑後、肥前、肥後、豊前をも領有する豊後の領主で、山口に「聖人」がいると言つた事を知つた大友義鎮（よししげ 宗麟 享禄3（1530）-天正15（87））の招聘によるものだつた。

求めに応じたザビエルは平戸から呼び寄せたトーレスの到着を待って山口の教会を彼に任せ、天文20(51)年9月に豊後へ向かって出発するのだった。そこでは、来航していたポルトガル人の盛大な歓迎が待っていたのである。

日本の宗(仏)教界の腐敗と迷信の流行に対し、宣教師の敬虔な信仰と謹厳な生活態度に好感を持ったと言う事、更には、鉄砲、大砲等の火器に代表される西欧の文化・文明の受容と貿易による「利」を得ようとする義鎮(宗麟)の思惑によるものだった。アンジローをマラッカへ連れて行ったアルヴァレスのようなポルトガル商人が沖之浜に5回来航していたと言う状況の中での、45歳のザビエルと21歳の若き義鎮との邂逅だった。

既に、来航していたポルトガル人によりキリスト教についての知識を得ていた義鎮だったのだが、ザビエルとの邂逅で何を得たのだろうか。

豊後の領主の弟は、山口の領主となった。比の豊後の領主は、非常なポルトガル人の友人である。そして好戦家が澤山ある。領地は広い。又、ポルトガル王の努力を識り、自らをポルトガル王の下僕ならびに友人と書いた手紙をもって、真情を捧げてゐる。

同上書 116頁

と、義鎮の事を記すと共に、大内義隆亡き後、その跡目を継いだ義鎮の弟長英(義長 ? - 弘治I(1557))についても触れてもいるのである。そして、

豊後の領主は、ポルトガル人にも私達にも、自分の弟が山口の領主となれば、トレス神父とフェルナンデス修士とを、保護厚遇せしめる、と言った。その弟自身も私に向かつて、山口についたらそのやうにする、と約束をした。

同上書 116頁

とも記しているのである。

府内でのザビエルは、義鎮のその後の入信に多大な影響を与え、この地をアルメイダ Francisco de Almeida (1450頃-1510)等の活動に見られる布教の一大拠点となる基礎を築くのだった。だが、日本滞在中、彼の離日を促す中国布教をどれだけ考えていたかはその『書簡抄』からは定かではないが、同年には日本を去りゴアへ戻っていくのである。

そして、ザビエルの離日後トーレスと共に日本布教に尽くしたリスボア(ン)生まれで、来航前にゴアで会っているガゴ Balthazar Gago (1515頃-83) 神父等を天文21年(1552)に

日本に派遣するのである。

彼らは、それ迄、トーレスが指導していた日本での布教活動、中でも府内での日本語の福音書作り、孤児院、病院の建設、貧民や病人の救済等の事業を推進したために、信者が急速に増えたと言われるのである。

日本語の達者なガゴの存在は日本布教に大変重要で、彼は平戸、山口の布教をも兼務するのだったが、病を得て、永禄4（1561）年にはゴアに戻ってしまうのである。

そして、ザビエルの去った後、残された者達、ガゴのような日本語に堪能な者、中でも、日本の風俗・習慣に溶けこもうと多大な努力をしたトーレスの功績は特筆される。

だが、その一方、ザビエルがいてのアンジローは、その立場を次第に難しくしていき、

アンジローは市来のミゲルのように、外界から隔離され城中に留まって自ら信仰と信者を守ることができなかった。彼には、妻子や母親がおり、ザビエルから信者を託されていたので、かつての召使で独身のジョアネやアントニオのようにザビエル洗教団の一員として再度インドと日本との間を往来し、信仰を貫くこともできなかった。このように、ミゲルにもアントニオにもジョアネにもなれなかったところにアンジローの悲劇があった。アンジローの最期はメンデス・ピント（フロイスも同じ）によれば八幡（倭寇）に巻き込まれて殺害されたということであるが、本当のところは分からない。

岸野『ザビエルの同伴者』 205頁

と言われるように、日本人最初のキリスト教徒と言われながらも、キリスト教徒として生涯を全うする事なく歴史の中に消えてしまったのである。

こうしてザビエルとアンジローとが中心となり、他の6人によって始まったキリスト教の日本布教は、ザビエルが去り中国布教を目指す中で亡くなり、アンジローにしてもあれ程篤く持っていた信仰を全うする事なく終わってしまったため、トーレスを始めとするザビエルを受け継いだ人々によって次の展開が示される事になるのである。

ローマ教会（ヴァチカン）からは聖人に列せられ、日本開教の祖と崇められているが、インドでの布教が3年、東南アジアで2年、日本で2年余と言うように、一ヶ所に止まっている期間が短かった。これは何故なのか。彼は「種を蒔く人」だったのか。

いずれにしても、わが国にキリスト教を伝えると共にそれに根差した西欧の文化・文明をもたらし、その後の歴史に大きな影響を与えたと言う事は否定できない。

彼の信仰に対する篤い「心」、それは見方によると独り善がりともとれなくはない側面を

感じさせるものではあるが、やはり、「聖人」なのだろう。

そして、歴史上の人物ではある。

結

本稿ではザビエルの日本における布教活動について考察を進めてきた。その熱意とは裏腹な、2年余と言う短い滞在をどう理解するかと言う事。

この2年余の滞在で、その後の布教活動を後に残したトーレスやフェルナンデスに任せておけば良いと言う見通しを得たのだろうか。

まさか、そこには一ヶ所に留まる事が出来ないと受けとれなくはない、それ迄の活動から感じさせられる彼の性癖とも言えそうなもの、そうしたものはなかっただろうと思うが、如何だったのであろうか。これを探る事は難しい。

そして、その後、布教は順調に進むかみえたが、天下を統一した豊臣秀吉の時にキリスト教の受難が始まるのである。

Research Notes

The Modernization of Japan:
The Connections with Europe and America
from the Viewpoint of World History

MATSUBARA, Masamichi

This time, I researched about Zabier after met with Anjiro in Malacca. After meeting Anjiro, he decided to abroad to Japan for the activity of mission. When Zabier came to Japan with his companies whose names are Torres, Fernandes, and Anjiro with his servants Antnio and Joane, included Manuel and Amadore as servant of Zabier.

When they arrived to Japan, the situation of Japan was the condition of chaos, the age of wars. So, they met the troubles to mission. Because, there were many generals to get a win for unity of Japan.

In this trend, Zabier and his companyies missioned Christianity for Japanese. Then, there were many troubles.

2 years odd later Zabier leaved to Goa, so, after then, the mission in Japan is inherited with his companies.